ウラジーミル・プロップ

昔話の形態学

北岡誠司・福田美智代訳

白馬書房

ウラジーミル・Я・プロップ

昔話の形態学

北岡　誠司
福田美智代 訳

ВЛАДИМИР·Я·ПРОПП

МОРФОЛОГИЯ СКАЗКИ

白馬書房

〔訳者紹介〕

北岡誠司(きたおか　せいじ)
1935年　東京都に生まれる
1967年　東京大学大学院比較文学比較文化博士課程中退
現　在　奈良女子大学文学部助教授
著訳書　「説話の深層構造」『ロシア・西欧・日本』所収（朝日出版社），「ベリンスキーと構造説話論」（岩波講座『文学』9），「文化の構造・知の構造」（岩波『思想』1980年1月），「テクスト理論の誕生」（岩波『思想』1981年11月），バフチン『言語と文化の記号論』（新時代社），イワーノフ・トポローフ『宇宙樹・神話・歴史記述』（岩波現代叢書）

福田美智代(ふくだ　みちよ)
1952年　奈良県に生まれる
1977年　奈良女子大学大学院文学研究科（修士課程）修了
現　在　奈良女子大学大学院人間文化研究科(博士課程)在学中。帝塚山大学・大阪樟蔭女子大学(各非常勤講師)
論　文　「現代英語における強調詞の用法」「感情表現としての進行形—その諸相—」「ことわざ」の分類—原理と実例—」（『奈良女子大学英語英米文学論集』）

昔話の形態学　　定価 5200 円

昭和58年10月31日　発行

著　者　ウラジーミル・プロップ
訳　者　北岡誠司
　　福田美智代
出版者　森田　隆

検印廃止

発行所　白馬書房
東京都千代田区神田神保町1-24
TEL (03) 292—0455
振替　東京　5-87155

印刷・製本　凸版印刷株式会社

© 1983　3039—10325—6971

第一部　方法と一般的結論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序

形態学は、他の科学では時たま偶然に論じられることを、主要な研究対象にし、他の科学では散り散りのまま放置されているものを集めて、一つの新しい立場を確立し、そこ〔新しい立場〕から、いろいろの自然物が、容易にかつ都合よく観察されるようにすることによって、初めて、独立した一つの科学として、正当性を認められるにちがいない。形態学には、すぐれた利点がある。それは、形態学を成り立たせている諸要素が、一般に承認されたものであるということ、形態学は、他のいかなる学説とも矛盾しないということ、それゆえ自分の占めるべき位置をつくるために何も取り除く必要のないこと、形態学の研究する現象がきわめて重要なものだということ、そして形態学が諸現象を比較対照する精神作業は、人間にふさわしく快適であり、たとえそのさい失敗した試みであっても、なお利益と快適さとを結びつけることができるだろう、というような点である。

——ゲーテ〔野村一郎訳。訳註1〕

形態学なる語が指し示すのは、形に関する学、です。植物学で、形態学なる用語のもとに理解されているのは、植物のさまざまな構成部分・構成部分相互の間の関係・構成部分と全体との関係にかかわる学です。つまり、植物の構造に関する学です。

ところで、昔話の形態学なる概念・用語が成り立ちうるものかどうか。この点についてはこれまで誰も考えてみませんでした。しかし、民間説話の領域においても、有機体に関してその形態学が成り立ちうるのとまったく同じように、昔話の形を検討し、その構造上のきまりを確立する〔形態学〕が成立可能です。

このことは、たとえ、あらゆる種類の民間説話に関しては、つまり、昔話全般に関しては、言えないとしても、すくなくとも、いわゆる魔法昔話〔アアルネ・トンプソンのモチーフ・インデックスの番号でいえば、第三〇〇番から第七四九番までに含まれる昔話〕、「語の本来の意味での」メルヘンに関しては、確実に言いうることです。

以下に示す試論は、かなり念入りにおこなった仕事の結果です。上記のような〔構成部分・その相互間の関係の比較検討、構成部分と全体との関係の〕比較検討は、これをおこなう研究者に、相当の忍耐を要求するものです。しかし、〔その比較検討の結果を記述するさいの〕記述の仕方に関しては、読む人の忍耐力を過度にためしたりすることのないような記述の仕方はないものか、それを見つけ出すことにも意をはらいました。

そのために、私たちの仕事は、三つの段階を経過しました。まず第一に、それは、大量の表・図式・分析〔実例の具体的な分析〕をふくんだ、厖大な研究でした。しかし、すでに分量が多すぎるという理由で、このような研究は、公刊不能ということになりました。〔そこで、第二に〕最小限の容量に最大限の内容をもりこむという狙いのもとに、〔この厖大な研究成果を〕縮約してみました。しかし、このように削除したり圧縮したりした記述は、〔そのまま出したのでは〕一般の読者に、近づきがたいものになってしまうでしょう。〔なぜなら〕、そうした縮約した記述は、文法書とか和声法の教科書とかに似たものになってしまうでしょう〔から〕。〔そこで、第三に〕記述の仕方を変更せざるをえませんでした〔現に本書に見られるように〕。たしかに、一般向けに〔やさしく〕述べることはできないといった類のものが、あることはあります。現に、本書のうちにも、そうしたもの

があります。しかし、それでも、本書のような記述の仕方でなら、私たちの仕事は、昔話を愛する誰にも、近づくことができると思います。もし、その人が、私たちのあとを追って、昔話の多様性の迷路のなかに、すすんで入りこんでくれさえするならば。この昔話の多様性も、結局は、その人の眼前に、おどろくべき一様性という姿をとって、立ち現れることになるでしょうから。

昔話の専門の研究者なら大切にするであろうと思われる多くのものも、叙述をより簡潔によりいきいきしたものにするために、割愛せざるをえませんでした。当初の形では、私たちの仕事は、以下に示してある〔登場人物の機能・役割の〕領域のほかに、登場人物の属性という内容豊富な領域の研究（実体としての登場人物に関する研究）をも、ふくんでおりました。また、昔話の変形（metamorphosis あるいは transformation）のさまざまな問題にも、くわしくふれておりました〔訳註2〕。そこにはまた、〔各昔話の構造を記号によって示した〕比較のための大きな図表も、ふくまれておりました（付録に残してあるのは、その図表の項目だけです）。本論に先きだって、いくつかの方法を見渡した比較的厳密な論述もありました。昔話の形態学上の構造だけではなく、昔話のきわめて特殊な論理上の構造をも、解明する予定でした。記述そのものも、〔本書に示したより〕ずっと詳細なものでした。ここでは、単に他と区別してそれとして取り出されているにすぎない要素も、当初は、ことこまかに検討され、互いに比較対照されておりました。しかし、要素をどう析出するかということは、私たちの仕事の全体の基軸となるものですし、結論をあらかじめ決定するものです。経験にとんだ読者なら、〔本書の記述をもとにして〕こうした原案を自ら想いえがくこともできるでしょう。

この第二版〔一九六九年〕は、第一版〔一九二八年〕と、いくつかの小さな修正をほどこし、何個所かをより詳しくのべなおしたという点で、異なっております。参考文献の目録は、不正確で時代遅れになったので、削除しました。アファナーシエフ編のロシア昔話集所収の昔話の通し番号も、革命前の昔話集の番号から、ソヴィエ

ト時代に出た版のそれに変えました。本書の末尾に、これら両版の番号の対照表を示しておきました〔訳註3〕。

I章　問題の歴史

この学問の歴史は、われわれが今立っている地点では、きわめて厳粛な様子をしている。たしかに、われわれは、われらの先達を高く評価し、かれらがわれわれのためにあげてくれた功績の故に、かれらに、ある程度は、感謝してもいる。しかし、それでも、誰しも、かれらを、抑えがたい衝動にかられて、ほとんど出口のない〔克服できない〕危険な状況においこまれた殉教者であるというふうに、好んでみなそうとも思わない。それにもかかわらず、われわれの存在に礎をすえてくれた先祖の方が、その遺産を〔享受し大方〕使い果してしまう子孫よりは、より真剣だ、という場合が多い（いや、それが普通である）。

――ゲーテ〔訳註4〕

〔研究状況〕一九二十年代末になっても、昔話をあつかった研究文献は、あまり豊富ではありませんでした。公刊された著書・論文がすくないということにくわえて、参考文献目録が示すのは、もっとも数多く出版されていたのが〔昔話の〕テクストであり、かなり多いのが、〔昔話の〕個々の問題をあつかった仕事、比較的すくないの

が、昔話を全般的にあつかった仕事という状態です。しかも、全般的な仕事がたとえあったとしても、それらの仕事は、多くの場合、厳密に研究書としての性格をもたず、哲学的でディレッタント的な性格をもつものでした。これらの仕事は、十九世紀の博学な自然哲学者たちの労作を想わせるものでした。しかし、私たちが必要としていたのは、正確な観察・分析・結論です。このような状態を、スペランスキー教授は、次のように特徴づけておりました。

「民間伝承研究は、すでに得られた結論に立ちどまろうとはせず、これまで集めた資料では一般論を組みたてるに、いぜん不充分であるとみなして、資料さがしをつづけている。そこで、民俗学は、これからやってくる世代のために、資料を集め、資料を整理することに、再びとりかかっている。が、〔これらの資料から引きだせる〕一般的結論がどのようなものになるか、また、いつになったらそうした結論を引き出せるかは、分らない。[1]」

二〇年代に、昔話論が、このような無力な状態・このような袋小路におちこんでしまったのは、なぜなのでしょうか。

〔資料集め〕 スペランスキーは、その原因を、資料が不充分だという点に見ております。しかし、右に引いた一文が書かれてから〔一九一七年〕、多くの歳月がたちました。その間に、『グリム兄弟の童話への註釈』と題されたヴォルテとポリフカの浩瀚な労作も完結しました。[2] ここでは、グリム童話集のいずれの話にたいしても、全世界から類話（ヴァリアント）が結びつけられております。第三巻は、参考文献目録で終っておりますが、そこには、典拠となったもの、いいかえると、著者たちが知っていた全ての昔話集や昔話をふくむその他の資料集があげられております。このリストは、およそ千二百の書名をふくんでおります。たしかに、資料集のうちには、偶然に集められたものからなる小さな資料集もありはしますが、しかし、『千夜一夜物語』や、ほとんど六百篇のテクストをふくむアファナーシエフの昔話集のような、きわめて大きな昔話集も、含まれています。しかし、それでもまだ全て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ではありません。厖大な数の昔話の資料は、まだ出版されてもいません。その一部は、まだ記録されてさえいません。これらの厖大な資料は、さまざまな機関なり個人なりの保管庫に保存されております。専門の研究者には、それらの資料集の若干のものを見ることができます。それによって、ヴォルテとポリフカの資料を、個々の話に関して、増補することもできます。しかし、たとえそうであるにしろ、私たちが一般に自由に処理できるのは、一体どのくらいの数の昔話なのでしょうか。そしてさらに、すでに印刷されている資料なりと自らのものとしている研究者が、数多くいるでしょうか。

このような条件のもとでは、「集めた資料がまだ充分ではない」とは言えないはずです。

〔方法に問題〕そこで、問題は、資料の量にあるのではない、ということになります。問題は、別のところにあります。別のところとは、研究の方法です。

物理系・数理系の学問には、整然とした分類の仕方もあれば、特別の会議で採用された一貫した用語法もあります。師資相承によって完全なものに近づきつつある方法もあります。それに対し、私たち〔説話論者のところには〕そのいずれも欠けております。昔話の資料が、種々雑多で、眼をうばうばかりに多様・多彩であるために、問題を明晰・正確に提起し解決することは、きわめて困難になっております。本章の概観が、昔話研究の歴史を、首尾一貫した仕方で叙述することを狙いとしているというつもりはありません。短い序章で、そのような叙述をくりひろげることは、不可能です。また、さして必要でもありません。なぜなら、そうした研究史は、すでに一度ならず書かれておりますから。[3] そこで、私たちは、ここでは、ただ、昔話研究のいくつかの基本的な問題を解決しようとする試みに、批判的な光りを当て、あわせて、読者を、そうした基本的な問題の圏内に案内しようと思います。

〔共時／通時〕 まずほとんど疑いえないことだと思いますが、私たちをとりまいている現象や対象は、三つの側面から解明することができます。ひとつは、それらの現象や対象の構成要素とその構造という面からの解明です〔共時的な構造論〕。ひとつは、その発生という面からの解明です〔通時的な発生論〕。ひとつは、それらの現象や対象が受ける変化とその過程という面からの解明です〔通時的な変形論〕。しかし、いかなる現象・対象であれ、その発生〔及び変化の過程〕については、当の現象・対象〔の構成要素や構造〕を記述した後に、はじめて論じることができるということも、同じくまったく明瞭であり、いかなる論証も必要としないでしょう。

ところが、昔話の研究は、主に発生論的にのみおこなわれてきました。それも、その大部分が、〔昔話の構成要素と構造とについて〕あらかじめ体系的〔共時的〕に記述しようとすることなしに。しかしここでは、昔話の歴史〔通時〕的〔及び発生論的〕な研究の仕方については、さしあたりふれないことにします。ここでは、昔話の〔共時的な構造〕記述に関してのみ、ふれてゆくことにします。なぜなら、昔話の〔共時的な〕記述の問題をそれとして解明することなしに、〔昔話の〕発生論〔と変形論〕を展開すること——それが普通の展開の仕方なのですが——そうした展開の仕方は、まったく無益だからです。昔話がどこから発生し〔どう変形してきた〕のかという問題を解明するに先きだって、昔話とは何であるのかという問題を解明しなければならないことは、明白なことです。

〔分類の問題〕 昔話は、きわめて多種多様です。そこで、おそらく、全ての昔話を一時に研究することは、不可能でしょう。したがって、資料をいくつかの種類に分ける、つまり、資料を分類する必要があります。適切な分類は、科学的な記述の、最初の段階のひとつです。そこから先の研究が妥当かどうかも、分類が適切かどうかに

かかっております。しかし、たとえ分類があらゆる研究の根底をなしているとしても、分類それ自体は、ある予備的な検討の結果でなければなりません。ところが、私たちが実際に目にしているのは、その逆のことです。多くの研究者が、分類から始めております。それも、資料〔昔話〕の中からその本質に基づいて分類を導き出すのではなく、資料に、その外から分類をかぶせてゆく、という仕方で。いずれ先に行って見るように、まず分類をおこなう研究者たちは、それだけではなく、しばしば、分類するさいのもっとも簡単なきまりをも、破っております。スペランスキーがふれていたあの袋小路の原因の一端も、ここにあると思います。

いくつかの例をもとに、もう少しくわしくふれておきましょう。

〔イ、普通の分類（B・Φ・ミレル）〕　ごく普通におこなわれている昔話の区分は、昔話を、奇蹟的なことを内容とした伝奇説話・世間話・動物説話に分ける分類の仕方です。[4] 一見したところでは、総てが適切であるように見えるでしょう。しかし、否応なしに疑問がわいてきます。動物説話が、はたして、奇蹟的といえる要素、しかも、時によると、きわめて奇蹟的といえる要素をふくんでいないだろうか。あるいは逆に、伝奇説話のうちできわめて大きな役割をはたしているのが、他ならぬ動物ではないだろうか。それに、ここで用いられている弁別特徴〔伝奇／世間／動物〕も、充分に正確だといえるだろうか。アファナーシエフは、たとえば、漁師と魚との話を、動物説話のなかに入れております。これで、よいだろうか、それともよくないのだろうか。もしよくないとしたなら、何故であろうか。先へ行ってみるように、昔話は、同じような行為を、人間にも、モノにも、動物にも、きわめてやすやすと行わせております。こうした規則は、主に、いわゆる魔法昔話に当てはまりますが、それだけではなく、他の昔話のうちにも認められることです。この点に関してもっともよく知られている例のひとつは、収穫の分配についての話〔「ミーシャ、わたしは先よ、あんたは根よ」〕です。ロシアでは、だまされるの

は、熊です。が、西ヨーロッパの類話では、悪魔です。したがって、この西ヨーロッパの類話をふくめて考えれば、この話は、突如として、動物説話の範囲の外に出てしまうことになります。それでは、この話は、一体、どこに入るのか。これが、世間話でないことは、明らかです。なぜなら、世間の風習として、収穫がこの話の中で語られているような仕方で分配されていた場合が、どこで見られるでしょうか。さりとて、これは、また、伝奇説話でもない。そこで、この話は、こうした分類のうちには納まらない、ということになります。

しかし、それにもかかわらず、私たちがいずれ確認するように、この分類は、その根本では、正しいのです。ここで、研究者たちは、本能に導かれていたのです。そこで、かれらが実際に感じとっていたことと、かれらが現に語っている言葉とは、一致しないのです。火の鳥と灰色の狼との話を、動物説話のうちに入れるという点では、まずほとんど誰も間違うことはないでしょう。しかし又、私たちにとってはきわめて明白なことですが、アファナーシエフも、金の魚の話に関しては、間違いをおかしました。しかし、このことが私たちに分るのは、話のうちに、動物が描かれているかいないかによるのではなく、魔法昔話には、まったく独自な話の組み立てられ方があるからです。しかも、その独自な組み立てられ方は、すぐに感じとられるものであり、〔この魔法昔話というフォークロアの〕一下位ジャンルを規定してもいるのです。そのことを私たちが自覚しないということがあるにしても。そこで、先にあげたような〔伝奇／世間／動物という弁別特徴の〕図式にしたがって自分は分類しているのだと称しながら、実際には、それとは違った仕方で分類しているのです。自分の言っていることには矛盾することによって、まさしく正しくふるまっているのです。しかし、もしそうであるなら、いいかえると、もし無自覚のうちに分類の基礎にすえているのが、昔話の組み立てられ方であるとしたなら（もっとも、これはまだ解明されてもいなければ、注目されてさえいませんが）、昔話の分類の全体を、新しいレールの上にのせかえる必要があります。即ち、他の学科ですでにおこなわれているように、昔話の分類も、形式上の特徴、構造上の

特徴〔に基づいた分類〕に、切替える必要があります。が、そのためには、まず、それらの構造上の特徴を解明しておかねばなりません。

〔ロ、ヴントの分類〕　しかし、これは先走りすぎた言い方です。ここにのべたような事情は、今日にいたるまで、はっきりされないままになっております。〔ミレル〕以降のさまざまな試みも、実際のところ、改善にはなっておりません。たとえば、ヴントは、その有名な著書『民族心理学』[5]のなかで、次のような分類を提案しております。

一、神話的な寓意昔話（Mythologische Fabelmärchen）
二、純粋な魔法昔話（Reine Zaubermärchen）
三、生物学的な昔話と寓話（Biologische Märchen und Fabeln）
四、純粋な動物寓話（Reine Tierfabeln）
五、「起源」譚（Abstammungsmärchen）
六、笑話と笑いの寓話（Scherzmärchen und Scherzfabeln）
七、道徳的な寓話（Moralische Fabeln）

この分類は、それ以前のものに比べると、はるかに豊かなものになっております。しかし、この分類にも、異議をとなえる余地があります。寓話は（これは、七つの下位ジャンルのうちで五度出会う用語ですが）、形式を示したカテゴリーです。もっとも、この用語によってヴントが何を指し示しているのかは、明らかではありません。「笑話」という用語は、まったく受け容れえないものです。なぜなら、同一の話を、英雄譚とあつかうことも、滑稽譚とあつかうことも、可能だからです。さらに疑問なのは、「純粋な動物説話」と「道徳的な寓話」と

の間に、どのような違いがあるのか、という点です。いかなる点で、「純粋な動物説話」は、「道徳的」でないのか、また逆に、いかなる点で、「道徳的な寓話」は、「純粋な動物」説話でないのか。

〔ハ、筋による分類〕これまで検討してきた分類は、昔話の種類〔下位ジャンル〕に基づいた区分にかかわるものでした。しかし、そうした分類とならんで、話の筋に基づく区分もおこなわれております。

しかし、下位ジャンルへの区分がうまくいっていないとすれば、話の筋〔の類型〕への区分では、すでにまったくの混沌が始まりかけております。話の筋といったような複雑で限定されていない概念に、あらかじめはっきりした説明がまったくあたえられていない、あるいは、どの著者も自分流の説明をあたえている、という点については、ふれないことにしておきます。先まわりして言っておけば、魔法昔話を、話の筋に基づいて分類することは、実際のところ、まったく不可能である、と言えるでしょう。この種の分類も、先の下位ジャンルへの区分の場合と同じように、新しいレールにのせなおす必要があります。〔なぜなら〕昔話には、ひとつの特性がそなわっているからです。それは、ある話の構成部分が、なんの変更も加えられずに、別の話のなかに移されうる、という点です。この移転可能のきまりについては、くわしくは先へ行って明らかに示しますので、ここでは、たとえば、バーバ・ヤガー〔ロシアの魔女・山婆〕には、互いにまったく異なる昔話のうちで、きわめて多種多様な話の筋の中で、出会いうるという点を指摘するにとどめておいてよいでしょう。こうした特徴は、民間伝承の説話に固有の特性です。ところが、こうした特性にもかかわらず、話の筋は、普通、こんなふうに規定されております。話のなんらかのある部分（それも、しばしば、単に眼についたにすぎず、偶然えらばれた部分）がとりだされ、「…に関する」という一句がつけくわえられます。それで、定義はできあがり、というわけです。そこで、たとえば、大蛇との闘いが話の中で語られているとすれば、これは、「蛇退治に関する」話であり、コシチェイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com